広げよう リケジョの輪

女子中高生 筑波大でサイエンス合宿

石川助教（左）の指導の下、ミトコンドリアの観察実験を行う女子高校生（7日、つくば市の筑波大で）

教育ルネサンス

理系を志す女子中高生の裾野を広げようと、筑波大学（つくば市天王台）で今月6～8日に「夏休みサイエンス体験合宿」が開かれた。約100人が女性研究者と語り合い、大学レベルの実験にも挑戦した。

活躍する女性研究者の実像を知ってもらう狙いで、独立行政法人「科学技術振興機構」の支援を受けて昨年から開催している。今年も昨年同様、定員（100人）を超える応募があった。

日本の女性研究者の割合は14％で、英国（37・9％）、米国（34・3％）などに比べて低く、女子中高生が大学生活やキャリア形成について先輩と話す機会は少ない。そのため初日は10人の同大教員と語り合う場が設けられ、等身大の女性研究者に触れた。宿泊先のホテルには同大の女子学生が一緒に泊まり、筑波大付属坂戸高校3年の篠田楓さん（17）は「先生や大学生に日常生活や入試について相談できた」と満足そうだった。

2日目は「サイエンス実験体験」として17テーマを用意し、参加者は午前と午後に2テーマを体験した。

生命環境系の石川香助教のテーマは細胞内でエネルギーを作る器官「ミトコンドリア」の観察で、午後は5人が参加した。石川助教は、別の生命体だったミトコンドリアが細胞に取り込まれたとする説や、親子鑑定のDNA検査で使われることを紹介。合間には、実験に明け暮れた学生時代の思い出話も披露した。

参加者は実験器具と試薬を使ってミトコンドリアを観察できるように染色した。教科書では俵型の断面図が多いため、細長い糸のような様子を見て驚いていた。

夜には交流会も開かれ、中1から高3までが混在したチームで来年の合宿のあり方についてアイデアを出しあって親交を深めた。同大ダイバーシティ推進室長の庄司一子教授は「学校によっては理系仲間が少ない場合もある。仲間作りのために合宿タイプは効果的です」と強調した。

THE YOMIURI SHIMBUN
讀賣新聞
2014年（平成26年）
8月23日土曜日
処暑（しょしょ）

2014年8月23日　読売新聞　朝刊　28面